

すます学校へ行きにくくなってしまったようでした。いわゆる心身症というのですが、彼女については私も不思議に思うことがありました。というのは、学校からの報告に、彼女は「難聴のため、学校では補聴器を着用」とあるのですが、私の目の前では補聴器どころか、かなり小さな物音にも反応するのです。ある時彼女に確認すると、学校へ行くと先生の声も友だちの声も聞こえなくなってしまうとのこと。無意識のなせるわざとはいえ、見事な症状の出没に感服の至りでした。

○ 心の病気とは思ってもいなかった父親

学校ではこれまで再三、専門機関への相談を勧めていたようですが、両親は自分たちの問題で手一杯で、子どもの方まで手がまわらない状態でした。やっとけりがつくくと、それまで迷惑をかけていた分を取り戻そうと、父親は仕事人間に変身し、ただサボっているだけの子どもにまでつきあっていられないといった様子でした。そして三年生の十二月、「このままでは卒業を認められな

い」という学校側の強い姿勢に押されて、ようやく相談を申し込んできたのでした。

○ 初対面の人に対して警戒心がない

お父さんと一緒にあらわれた彼女は、一見していろいろな問題を感じさせる威力をもっている子どもでした。やせて、目ばかりがギョロツとしている上に、着ているものがチグハグ（上衣は冬物のジャンパーなのに、スカートは夏物）なのです。女親の目が行き届いていないことを感ずる一方、やせた体つきに母親がいる時も十分な愛を受けてきたのだろうか、疑問に思わせる雰囲気も漂わせていました。

続いて驚いたことは、面接室に入るなり、自分は生まれてこの方、いかに不幸な育ち方をしたか、自分の両親はどんなに悪い人間であるかということを一気にしゃべり出したことでした。普通多くの子どもたちは、初めての人間に対した時、相手がどんな人間であるかを探った上で、適当に自分を表現しはじめるものですが、彼女は

そういう手続きを取る気配がないのです。人なつっこいとか、社交的というのとは異なる、人見知りのなさとでも言うのでしょうか。乳児が母親とその他の人を弁別して人見知りをするのは、対人関係の発達の一歩であることはご承知かと思いますが、彼女はその頃の問題を出会いの場で私に提示したように思われました。未解決な問題なのか、病気（精神病）のために障害を受けたのかはわかりませんが、乳幼児期にクリアしていなければならぬ問題を、中学三年の段階で抱えているとしたら、彼女の不登校は相当深刻な事態も想定しなければ、と緊張させられました。

○ 止まるところを知らない親への不満

「うちの親は両方ともおかしい。父さんと母さんは小さい時からけんかばかりしていた。前にも一度離婚して今度また離婚した」「もういいかげんいやになった。小学校三年の時、こんな家にいたらダメになると思ってた家を出ようとしたんだけど、敷金とか礼金とかがないの

でアパートも借りられなかった」「母さんとサラ金をやっていたもんで、父さんはお金のことに細かくてケチ」「うちの親は子どもには金を食べさせながら、一々、大きな口をあけて食べて、誰のおかげだと思ってるだ」とか言うので、だんだん食べ物に喉に通らなくなてしまった。お腹はすいて食べたいんだけど、食べられない。今は一日に菓子パン一個とくだもの位。牛乳とか、幼児体験がよくないものは特にダメ」とのこと。これらのことから、彼女の「やせ」は拒食症からくるものとわかり、最初予想が的中して、教育相談で担当していける事例か否かの検討を迫られました。

○ 卒業証書はいらない

「ところで卒業の方はどうなりそうなの？」と、当面彼女の外側で話題になっていることに話を向けると「卒業は関係ない!!」と非常に激しい口調で否定し、「やりたい事がいっぱいあるし、履歴書が必要な仕事はしないから、卒業証書はあってもなくても同じ」と言うので

す。そしてカバンの中から新聞の切り抜きを取り出すと、「ねえこれ見て。このアルバイトどうかなあ。年齢不問というのを集めてきたんだけどどう思う？」と今までのつっぱった口調から一転して、甘えた声で意見を求めてきたのにはびっくりしました。彼女が抱えている問題からすると、とてもアルバイトが出来る状態ではないと思われたのですが、まだ中学生であるということを理由に意見を保留にしておきました。

○ それでも本当は皆と一緒に卒業したかった

一週間に一度相談に通ったことが認められて、彼女は三月、皆と一緒に卒業することができました。口ではつっぱっていても、卒業できることを知らされた時の彼女はたいへんでした。本当はうれしのに偉そうに一端のことを言っていた手前、大っぴらにはうれしと言えない。でもうれしい気持ちがついほとばしり出てしまっあわてる。そんな様子がありました。しかし、あわてている自分を私に気取られまいとして、なおも強がっ

てみせる姿に、この子の生きにくさを感じたものでした。

○ 中味が空洞の中学三年生

彼女は勘の鋭い頭の良い子です。それだけに両親が自分たちのいざこざに取り紛れている間に、彼女は本を読み、物を書く楽しみをいつしか身につけたようです。ですから実に物知りで弁が立つので、周囲の者は彼女の社会性のなさ、特に対人関係上の緊張には気づきにくいようです。

先日もうやくアルバイトが見つかり、いざ面接という時になっていろいろ言い出したのです。自転車で十分位の所なのに「私そっちの方へ行ったことがないんです」とか、「一日三時間、週三日なんて勝手すぎるんじゃないかなあ」と、将来自立するための資金稼ぎをするのだと、張り切って探していた時には予想も出来なかった事を言い出して、父親から叱られてしまいました。言うことがくるくる変わる飽きっぽい子どもというのが父

親の評価ですが、私は、むしろこれが彼女の本当の姿ではないかと思いました。そして、この事件をきっかけに、今日の彼女のこの状態は、普通には両親に見守られて、両親と共に生活する中で育まれていくものが、長い間の葛藤のはざまにあって、中味が育っていない結果ではないかと、父親と話し合いました。

事例 2 お父さんなんか大きい

——父親似である自分を抹消したい——

○ 美容整形を迫る醜貌恐怖

秋子さんは、中学二年頃から自分の容貌に関心をもち始め、高校に入るととたんに勉強が手につかなくなりました。「みんなが自分の顔を見ているような気がする。どこかおかしいから見ているに違いない。だから、整形手術をしてこの顔を変えてくれなかったら学校に行けない」というのです。

お母さんは、神様から授かった顔を変えるなんてとん

でもない、と最初から事この件に関しては一貫した姿勢を貫いているのですが、お父さんは、三人いる子どもの中で、殊の外、彼女をかわいがってきただけに、彼女の要求には弱いのです。こうして学校へ行かない日がか月、二か月続くと、「そんなにまで思いつめているものならば、いつそ望みを叶えてやった方がいいのではないか」と思ったりするようでした。ささった刺は抜けは治るものだからというのがお父さんの言い方ですが、結婚以来、お父さんに逆らったことがないというお母さんも、こればかりは承服しかねると、一歩も譲りません。

○ 会社の地位を家庭に持ち込む父親

お父さんは、田舎から出てきて一代で今の会社を築き上げた苦勞人です。それだけに自分に自信があり、他の人の意見に耳を傾けるといふことが少ない人のようです。家計も必要なものはいくらでも出してくれるのですが、何にいくらということまで全部管理されていて、お

母さんが自由になるお金は一円もないとのこと。ちょっと使途不明があるとすかさず聞かれるし、お金のことだけでなく、生活のすべてがお父さんに管理されていて、「家に帰ってまであの人は社長みたいです」とお母さんは言うのです。たとえば、彼女がきょうも学校を休みそうだと思うと、「○時に学校へ電話をしておきなさい」と言い置いて出勤し、会社に着くなり「先生は何か言っていないかったか」と折り返し電話をしてくるお父さんのようでした。

見合い結婚をして間もなくの頃、田舎の自分の父親に對して、電話で偉そうに命令しているので、「気分を書かれなくちゃいいんですけどね」とつぶやいたところ、「なにい!!」となぐられて二、三日跡が消えなかったことがあって以来「私はあの人には逆らわないことにしました」というお母さんでした。

○ うちはお母さんだからもってきた

この両親にとつての長子である秋子さんは、両親のこ

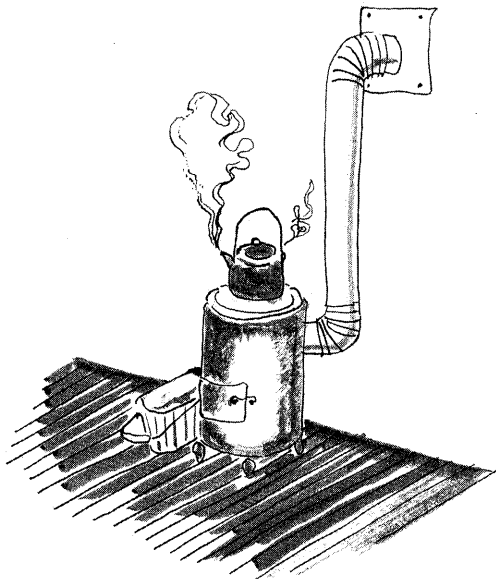
うした関係をじっと見て成長してきました。そして思春期になり、いろいろなことがわかるにつれて「うちはお母さんだから今までもってきたんだよね」と言うようになりました。最近では、家でのお父さんの言動に一夕聞き耳を立て、「何よ、偉そうに」と聞こえよがしに言ってみたり、「私ってお父さんそっくりなのよね。だからこの顔を変えてくれなかったら学校へ行つてやらない」と脅しをかけたたりして、お母さんは気が気ではありません。

○ 甘やかされるだけでは社会性は育たない

三人の子どもの中で、彼女だけが特別扱いされていること、お母さんからみると、彼女が友だちとうまくやっていない原因の一つでした。マイケル・ジャクソンの来日コンサートに行きたいと言えば、お父さんはどこからチケットを手配してくれるし、レコードを買いたいからアルバイトをすると言えば、「そんなことをする位なら、もっと勉強をきなさい」と一か月のお小遣いをポ

ンと六千円にアップしてくれるので、お父さんの甘やかしぶりは目に余る感じです。お母さんは、彼女がマイケル・ジャクソンのチケットを売出しの前日から友だちと並ぶ約束をされており、困ったな思っていたのでホッとした反面、このところ友だちとの交流が途絶えていたことを考えると、せっかくのチャンスをお父さんは……と、思う気持ちとで複雑でした。

また家の中でも彼女は女王様で、それをお父さんが助長しているようでした。たとえば、彼女がテレビを見る席というのがいつの間にか決まっていて、そこに他のきょうだいがすわっていると、お父さんは「ほらそこどきなさい」と当然のようにその席を彼女に譲らせるのでした。こういう事が起こる前まではお母さんも気にとめて見たことはなかったのですが、改めてお父さんのやり方を注意してみると、これでは、彼女に外で友だちと仲良くしなさいと言っても出来るわけがないと思っただけです。そして「私も自分だけが我慢していればよいと思っ



と主人とけんかをしてでも主人のワンマンを直して来なければいけないか」と考え込んでしまうお母さんでした。

結果的には彼女の美容整形へのこだわりは、自分に「ノー」を言えないお父さんへの挑戦で、容易には「イ

「エス」と言えないような内容を心の無意識が選択して、お父さんに迫った事件ではないかと解釈することができました。このお父さんが他人の意見に耳を傾け、最愛の彼女に「ノー」といえるようになれば、彼女は美容整形を父親に迫る必要がなくなるのではないかと予想しております。

以上二つの事例は、子どもが様々な症状を出すことによって、両親の世代が抱えている問題を白日の下にさらすことになった事例をとりあげたつもりです。前回のうその例では、その背景にその家庭内の人間関係の縮図が指摘されましたが、今回は親の生き方を問う形で子どもが問題行動を起こした例といえます。

一方、親の生き方を問うのは思春期の課題そのものでもあるわけで、人間である以上、避けては通れない関所のようなものです。そこで健康な機能を維持している家庭では、子どもがつきつけてくる無理難題を、親としての立場で受けとめ、四つに組んでこの時期を通過するの

だと思われませんが、どこかに歪みがありながらかうじけて家庭という形態を保っているような場合には、そこで問題が噴出するか、子どもがあえて問題提起をしない限り、両親のそうした生き方は修正されることなく次の世代へと引き継がれていくものと思われます。その意味では、ここに登場した二人は正に自分の身を挺して家庭の変革者たらんとした真の勇者といえます。最近は核家族化が進み、なおかつ住宅事情が悪化する中で、両親が抱える問題がもろに子どもに影響する例が増えているように思われます。それ故、家族療法というのが脚光をあびるようになったのも時代の流れのような気がします。

また母親が母親であることだけで十分という時代ではなくなり、母であると同時に自分自身であり、さらには職業人でもあるという時代を迎えて、子どもたちが子どもとして大切にされることが保障されにくくなりつつあるように思われます。その一つの典型が、東京の豊島区で中学三年の男の子を頭に五人の子どもが置き去りにされた事件がありました。また記憶に新しいことと思

ます。これほどではないにしても、子育てを他人まかせにして仕事に夢中な母親。放課後の子どもを塾にといい風潮が子どもと共に食卓を囲むということを奪い去り、子どもはほっかほっか弁当でお母さんはカラオケバーといった例は事欠きません。そういう中で子どもたちはどう生きていくか、子どもの問題行動が多様化、複雑化していく現在、相談にかかわる者として家庭がどうあったらよいか見えにくくなっている昨今です。

今までに六回にわたり教育相談の窓口から子育てについて考えてまいりました。心を病んだ子どもたちと共に

いると、不器用で純粋なるが故に、うまく世渡りが出来ないことを感じます。打算的で能率のみを追求しがちな世の中にあって、こういう子どもたちが存在することにどこかホっとした安らぎを感じてしまうのは、私自身に彼らと共鳴しあう何かがあるからでしょうか。これからもきっと、彼らの問題行動（症状）が比喩しているなぞ解きの魅力の虜となって、人生とはを教わり続けていくことと思えます。

（東京都立教育研究所）

